

# 南十字星

大阪大学外国語学部  
(旧大阪外国語大学)  
インドネシア語同窓会

2008年秋 第7号

発行 南十字星会

連絡先 大阪府池田市五月丘 2-5-113-402

電話 Fax 072-753-1693

Email rocky3@wombat.zaq.ne.jp

## 通算 20 年の インドネシア勤務で思うこと

岩井 俊之 (’61 卒)

インドネシアに勤務する日本人の間で囁かれる言葉に「インドネシアは、納豆の糸のような切っても切れない思いがあって、何度でも行きたくなる不思議な魅力ある国」というのがあります。私はこの言葉にぴったりの人間だったのか、ある時は2年、また5年、そして家族帯同の6年半などの勤務を重ね、いつの間にか通算20年の勤務を経験する結果となりました。

私のインドネシア勤務は1966年(昭和41年)11月、会社(蝶理)のジャカルタ駐在員として、小雨そぼ降るクマヨラン空港に降り立った時に始まりました。その前年の65年には世にいう9月30日事件が発生、ジャカルタは戦車や装甲車が街角に待機し、治安が極めて不安定でした。74年1月15日には反日の暴動がありました。そして最後に勤務が終わって帰国したのが99年7月でした。その前年の98年5月21日には、スハルト大統領の突然の辞任表明があったのです。

私は32年のスハルト政権下社会で、黙々と20年間に亘り勤務してきた日本人の1人だったのです。特に印象に残った3つのことを述べてみたいと思います。

### (1) スハルト政権の崩壊

98年5月21日のスハルト大統領の突然の辞任表明は、大きなショックでした。歴史的な瞬間を見逃すまいと、必死にテレビの生中継を見ていました。

あれほど強権を誇ったスハルト大統領が、見たこともない、元気がない、疲れきった姿で、映し出されていました。テレビに映る大統領の姿を目の当たりにして、一瞬思い出したのは、「平家物語」に登場する平家一族のことでした。一の谷、屋島へと追い詰め

られ、最後に壇ノ浦で滅亡した平家一族とスハルト政権崩壊を重ねて見

ていたのです。同時に「祇園精舎の鐘の声」から始まる巻頭の名句を思い浮かべていました。「奢れる人も久しからず、唯春の夜の夢の如し。たけき者も遂には滅びぬ、偏に風の前の塵に同じ」。その日は興奮して社宅で眠れぬ一夜を過ごしました。

振り返ってみれば、私のインドネシア勤務の時期は将にスハルト政権の誕生から退陣までの32年間の中にほぼすっぽり収まるものでした。「開発の父」といわれた同大統領は「国家建設」や「外資導入」の政策を推進し、「アセアンの創設」にも尽力するなど、それは積極・果敢なものでした。ただ、あまりにも長い政権は「汚職」「癒着」「縁故主義」という弊害を生みました。特にサリム、アストラ、シナルマス、そしてリッポーなどの大財閥グループが国家の重要な利権やライセンスを得るために、大統領の子供(息子3人、娘3人)や親族が関わるビジネスを支援し、大統領一族は大きな蓄財を得たのです。

しかし、一族の不正蓄財疑惑が解明されないまま2008年1月27日、スハルト元大統領は多臓器不全のため死去。享年86歳でした。

スハルト元大統領はいろいろと批判されましたが、功績は高く評価すべきと思うのです。中立・容共のスカルノ政権とは違い、反共・親米路線のスハルト政権はインドネシアに今日のような繁栄・発展をもたらしたと考えるからです。



スハルト氏死亡翌日の地元 KOMPAS 紙の1面。「Warisan Soeharto」の見出しで、氏が「遺したこと」を解説していた

路地裏の風景。下水溝のそばに荷車も

## (2) ジャカルタの路地裏での生活

90 - 95 年の 5 年間、私はインドネシア系企業のトリメックス社(繊維大手のトリスラ・グループの本社)に勤務しました。社宅がジャカルタ東部のチラチャスという田



舎町の工場内の一角にありました。一般庶民が住む家々が密集し、いわゆる「路地裏」と称する場所です。この地域の環境の劣悪さには驚くばかりでした。

交通の盛んな表通りから一步中に入ると、元の場所に返るのが難しいほど、狭い道が網の目のように走っていました。今にも倒壊しそうな、小さな民家が所狭しと建ち、蓋のない下水道から、悪臭が遠慮なく放たれていました。

それでも地域の人たちは劣悪な環境にはお構いなく、平然とした生活を送っています。それどころか、いつも笑顔を浮かべ、幸せそうな表情をしていました。GOTONG-ROYONG(相互扶助)の精神が浸透、互いに助け合い、励まし合う人々の姿がありました。

夕日が落ちて周囲が暗くなる頃、私は路地裏を散歩することがありました。家々の明かりが

灯ると、家の中が透けて丸見えでした。そこには楽しそうにテレビを見ている父子の姿、台所で忙しく夕飯の用意をする主婦の姿、楽しく夕食を摂る一家団欒の姿などが影絵芝居のように映し出されていました。この地域の人たちは、たとえ貧しくとも、楽しく、幸せそうでした。

この 5 年間、私がジャカルタの路地裏に住んで学んだことは「人の幸せとは一体何なのか」ということでした。それは「人はたとえ貧しくとも、幸せは得られる」「幸せは心の持ち方一つで得られる」ということです。地域の人々の中に芽生えている「人情味」や「人間愛」にとても感動しました。日本人として滅多にできない路地裏の生活で、私は願っても叶わない貴重な体験をしました。



㊤ジャワの農村  
㊦リングルジャティ協定が結ばれた建物

「自殺」や「いじめ」が多い今の日本社会が、こういった「幸せ」や「人間愛」に満ちたジャカルタの路地裏社会を参考にすれば、もっと良くなると思うのですが。

## (3) ジャワの農村家庭とリングルジャティ訪問

かねて私はジャワの農村家庭を訪問したいと思っていました。そのチャンスが 99 年 6 月にやっと訪れました。目指すは中部ジャワ北部の町・ブルベス近郊の農村。ブルベスはチレボンの東約 60 ㎞にある町です。訪れた先はプトウンジュンガンという小さな農村でした。

ジャワ島の幹線道路は整備されていますが、幹線から外れて中へ入るとデコボコ道ばかりで驚きました。車は少しずつしか進めません。ジャワ横断鉄道の無人踏み切りにも出合うのですが、警報機や遮断機が無く、いつ事故があってもおかしくない危険な状態でした。

訪れた中部ジャワの農村は、大変貧しく、教育水準が低く、医療環境が悪い状況にありました。若い人は仕事を求めて大都会へ出て行き、村に残るのは年寄りや子供

たちばかり。ジャワ語しか話せない人がいました。でも、のんびりした生活や人々の純真さは、とても印象深いものでした。

農村家庭の訪問を終えてジャカルタへ

の帰途、リングルジャティに立ち寄りしました。リングルジャティは幹線

道路から車で 30 分ほどの小高い丘の上

にありました。昔、中西龍雄先生のインドネシア歴史の講義の中に「リングルジャティ協定」があったことを思い出していました。ここが「協定が結ばれた会場」なのかと感傷的な気持ちになり、暫しの間、佇んでいました。学校時代に教わったことを、40 年の時が過ぎて自身の目で確認できたのです。感無量でした。

因みに「リングルジャティ協定」とは 46 年 11 月 15 日、イギリスの調停で当時のシャフリル内閣がオランダと結んだ協定。オランダがジャワ、スマトラにおけるインドネシア共和国の支配権を認め、インドネシア連邦の実現に努めるという内容でした。

長くインドネシアに滞在していると、思わぬ場所に出会うことがあります。リングルジャティはその 1 つです。



## アチェ支援

## OGASAのレポート

地震・津波の被災地アチェを支援する「学生の会」(OGASA)は08年3月下旬から春休みを利用して6回目のアチェ訪問をした。滞在9日間。メンバーは6人(全て2回生)。それぞれの感想と現地の写真を添えた。

紛争と津波で親を亡くした子供たちが暮らす「プカンバダ孤児院」を初めて訪ねた。子供たちとの励まし交流の中で、インタビューを実施。津波が起きたときの状況やそれ以前の生活、家族のことなどをドキュメンタリーにまとめる作業を進めている。

小学校では絵や折り紙指導のほか、ドラえもん劇を見せながら、ユニークな「防災の授業」も行った。

また、津波後にできた仮設住宅や復興住宅にアスベストが使われていたのが、新たな問題として浮上している。このため、事前に日本のアスベスト問題対処を

含めデータや資料を準備、現地では大学や女性人権団体にインドネシア語でプレゼンテーションをした。

大災害から3年半。復興が進み、海外からのさまざまな支援のNGOはすでに撤退している。OGASAの活動もこの夏の第7回訪問(8月17日~23日)で現地に出かけるのは一応ピリオドを打つことになった。

学生らは“支援”の訪問を重ねてきたが、「現地で自分たちの得たものの方がはるかに多かった」と振り返る。最後の訪問を前にこう語った。「アチェとのつながりは、ずっと消えない。そう挨拶してくるつもり...」。



森下友紀子代表 「孤児院の子供たちが家族のことを話すときは泣くんでいて、とても他人ごととは思えなかった。“また来てね!”と手を振ってくれる。会えてよかったと思った。アスベスト問題でも、資料がほしいとか住民に働きかけるとい話を聞き、新しいプレゼンの試みに手ごたえを感じた」

片岡敏江 「特に印象深かったのは孤児院の子供たちと交流したこと。子供たちは元気な姿を見せていたけれど、その裏側には津波のトラウマ、傷跡がまだまだ消え去っていないようだった。アチェはまだ多くの問題、課題を抱えている。いろいろ学んだが、もっと知り、何ができるか考えたい」

孤児院で

西岡郁恵 「私はドラえもんになんて扮して子供に質問。“Masih ingat kan?”(まだ津波を覚えているか)。すると“Masih!”(まだ覚えている)と一斉に。ドラえもんの絵の色塗りはみんな個性的だった。一人ひとりが苦難を乗り越え、個性を伸ばして行ってほしい」

山本智美 「街や村の建物は新しい。津波のあと再建されたものが目立った。でも、住民の表情は暗くなかった。現地で活動する支援団体の人たちの意識の高さに驚いた。自立を促す活動に感心した。そんな団体も視野に入れて協力していければと思う」



豊田麻琴 「孤児院の子供たちと会い、現地の人の話を聞き、津波で亡くなった人々のお墓を見て、津波が与えた影響をひしひしと感じさせられた。日本でも私たちにできることを極力やって、役に立ちたいと強く感じた」

御厨信行 「初の訪問で、アチェが身近で重要な存在になった。出会った人たちは今や皆僕たちの Ibu や Bapak, kakak - adik であり、友人である。彼らは僕たちに貴重な勉強の機会とたくさんの親切、笑顔を与えてくれた」



復興住宅にはアスベスト問題も



## キャンパス便り

大阪大学大学院  
国際公共政策研究科 教授 松野 明久  
(外国語学部インドネシア語専攻担当教員)



### 統合後、初の新生入学生

この4月、統合後初の学生が入学した。インドネシア語の入学定員は10人。実際の授業は、入学者11人に日本語専攻の学生、進級できなかった者、聴講生を合わせ、合計14人で行っている。以前は1年次25人程度で授業をしていたので、ごんまりしていて教えやすい。しかし、入学定員10人というのは25専攻語の中でも最低であり、日本におけるインドネシア語教育の需要・必要性という点から再考の余地ありと思っている。(入学定員は教員の新外国語学部での担当可能授業数によって決められており、当該言語の需要・人気・必要性からではなかったという経緯がある。)

入学者11人中男子が1人というのはちょっと気の毒だが、ともあれクラスは元気いっぱい、木曜1限目(8時50分開始)の私の授業にもみなよくがんばって出席している。箕面キャンパスで行われる外大時代からの行事「夏祭り」にも参加した。新学生は1年間の共通教育(教養)課程を他学部学生と一緒に過ごし、

### 学生たちの意欲

さて、昨今の学生たちの学ぶ意欲はどうか。先輩諸氏たちの気になるところだろう。一言で言えば、学ぶ意欲は高いと思う。これはいろいろな点から言える。

まずひとつは卒業論文。大学での勉強の仕上げとして卒論を書くことを、教員一同、学生に勧めている。卒論は今では選択科目なので、2科目を追加履修することで代替できる。しかし、人文系学部としてはやはりまとまった文章を書くということをもって仕上げとしたいし、それによって得られる達成感を味わって欲しいと思う。卒論執筆人数は2005年度9人、2006年度6人、2007年度7人と推移しており、2008年度は5人となっている。学生定員15名の3分の1から半分程度の学生が卒論を執筆しているに過ぎないが、彼らはあえて「荊の道」を選んでいる意欲旺盛な学生たちと言える。教員は、いろんな文献をそつなくまとめた論文

2年次から箕面キャンパスに移動して専攻課程に入る。1年次の間は豊中キャンパスの総合大学としての醍醐味を満喫できる。

一方、阪大の共通教育課程は本来1.5年(つまり3セメスター)なので、外国語学部は他学部と比べ教養課程を半年切り詰めて進むことになる。また、1・2年次に週5コマ専攻語を勉強するという外大時代のカリキュラムがそのまま維持されている。さらに新外国語学部では国際文化学科がないので、専攻語科目以外の法律・政治・経済・文化といった学問分野の授業はなくなる。語学学校時代のカリキュラムに逆戻りする感があるのは否めない。ただでさえ専攻のたこつぼ化が激しい今日、総合大学の外国語学部として、他学部・教養との接続をどのように確保していくかが今後の課題となるだろう。



#### 専攻語のPRに一役買う1年生たち

7月26日に行われたオープンキャンパスで、模擬授業のあと、1年生たちが踊りを披露。ひとことずつ入学後の体験談も紹介して「お勤めの言語です」「少人数でみんな仲よし」「一緒にインドネシア語を勉強しましょう。待ってます!!」

を望んではない。(これにもそれなりの要領が必要なのだが。)むしろ、すったもんだしたあげく、ふっと一歩前へ踏み出せた、そんな「自己進化」の跡が感じられるようなものを欲している。どんな小さなことでもいい、新しいものを生み出してこそ「知的生産」と言えるからだ。そうした論文に時々出会う。



次に留学。旅行、ホームステイ、ボランティア活動などでインドネシアに短期で行く学生は多いので、昔に比べればインドネシアと直接触れる学生はだいぶ増えた。ただ、インドネシアの大学に留学する学生は例年2、3人に留まっている。

留学は語学力の面はもちろんだが、人生経験として多くのものをもたらしてくれる。しかし、そうした「あいまいな」成果では学生を引きつけられないのかも知れない。

### 民主主義と和平プロセス - 私の研究の半年間

2006年の東ティモールの危機を受けて、1999年来国連を中心として国際社会の監督の下に進められてきた平和構築と国家建設の歩みを振り返ることになった。そんな中で前から疑問に思っていた「表面的な民主主義」に大きな原因があるのではないかと考え、民主主義



ダーウィン郊外にある第二次大戦中の飛行艇基地跡。インドネシア・東ティモールの日本軍の偵察を目的としていた

と平和構築プロセスの関係を探求しようと思った。

2008年になって2つの国際会議でこのテーマで発表した。まずはオース

トラリアのダーウィンで行われたチャールズ・ダーウィン大学主催の会議「東ティモールの民主的統治」(2月7・8日)で「東ティモールにおける国連行政と民主主義構築」と題して、国連暫定行政下での性急な国家建設がトップダウンの中央集権的な体制を形成した経緯をたどった。

次に、ベルギーのルーベントリック大学で開催された国際平和研究学会の2008年度世界大会で「紛争後社会の安定と民主主義：東ティモール

一方、英語圏への留学及びワーキング・ホリデーでの渡航は増えており、毎年3、4人がオーストラリア、カナダ、米国などへ行く。英語ができるようになりたいというのは誰もが思うこと。卒業後インドネシア語より英語が求められるのも事実だ。学生は短期でのインドネシアでの経験を求めている。決して学ぶ意欲が少ないのではない。今後は、おそらくインドネシアでの研修を大学の課程に組み込むかたちで実施するなど工夫が必要だろう。



ベルギーで学会分科会の発表者たちと。ミナンカバウ母系制についての言及があった

の事例」と題して発表し、独立後の東ティモールがエリート主義政治に走り、透明性も説明責任も欠いているさまを描いた。

前者はオーストラリアで出版される本に収められ、後者はドイツのある研究所のシリーズ公刊物に収められることになった。

何も国際社会だけが悪いのではなくて、ものごとは国際的関与とローカル・ポリティクスの中から決まってくる。

ベルギーではパレスティナ和平(オスロ・プロセス)崩壊に関して、パレスティナ人自治政府の汚職、内的不和が原因であったという発表を聞き、民主主義の原則の維持が和平プロセスの維持にとっても重要だと確信をもった。国際的関与というのは難しい。今後も

その複雑なパターンを研究し、政策提言につなげていきたい。



ルーベントリック大の図書館

## ジャカルタ発



## 縁(えにし)

扇谷 竹美 ('66卒)

卒業して42年。その歳月の半ばをインドネシアに過ごしました。特に好きな土地だからという訳でもなく、業務の求めるまま、生活のために、振り返ると長いつながりを持つことになってしまいました。迷える仔羊

が外大インドネシア語の門をくぐったのが、この経歴の基です。運命とも言うべき「縁」を感じます。

96年から3年間、ボゴールで生活したことがあります。ワイフを帯同しており、私は彼女に安心の出来る、少しでも広がりのある生活をと願っていました。ジャカルタでは日本人社

会が根付き、色々な組織もあります。でも、初めてのボゴールでは、何もかも手探りです。糸を手繰り寄せていくうちに多くの日本人女性が在住されることが分かり、付き合いが広がって行きました。多くの方はインドネシア人留学生らと結ばれ、勇躍この地に渡って来られた人たちでした。

ある日、無謀にも、知る限りの日本人家族の皆様らを我が家にお招きしました。手狭な家でしたが、私が自前の握り寿司を用意すると吹聴し、さらにお互いのよき交流を願ってお集まりいただいたのです。

この時の来客の中にファリダさんがおられました。外大インドネシア語講師として長年教鞭を執られたナジール先生の娘さん、恩師の肉親でした。ボゴール農科大学教授であるご主人のバサリブ先生と二人のお嬢さんをご同伴くださいました。お嬢さん二人は共にインドネシア大学を卒業し、現在は夫々に幸せな家庭を持っておられます。ファリダさんは、ご高齢のお母さんのご機嫌伺いに時々神戸にも往来しておられるようです。この奇しき邂逅に大いに驚き、感激致しました。



ナジール先生の娘さんのファリダさん。ご自宅で夫・バサリブ教授と

これこそ「縁」と思った次第です。

他の女性方も60年代初めに在住されたケースがほとんどでした。激動のインドネシアで、夢に描いた幸せばかりではなく、多くの辛酸も体験されたことと思います。苦楽を分かち力強く歩んでこられ、しっかりと地に足が着いた家庭を築いておられています。互いに思いやる気持ちがあり、信頼できる“お母さんたち”であります。

米国留学組のブンガラン・サラギ教授(ボゴール農科大学)・美芳子夫人とも親しく話し合いました。同教授はこの2年後、メガワティ大統領時の農業大臣として入閣。驚きと同時に、親しき人の大臣誕生に誇らしく思い、心からの声援を送りました。今は、大学に

復職し研究生活を続けておられます。

また、ヘル・衛藤さんが由美子夫人と二人のお子さんを同伴されました。氏の父君は元日本軍兵



ボゴールに住む日本人の奥様たち。ヨガの集いで

士で、インドネシア

独立戦争の英雄として遇された方です。ヘルさんは日系大企業取締役の傍ら、元日本軍残留兵士の「福祉友の会」を介助し、会長としてその運営に従事。奥さんが経営指導するバレエ教室にも深く関わるなど、精力的な活動しておられます。寿司パーティーはその後も、二度三度集いを持たせていただきました。

今、私はジャカルタに住んでいますが、ワイフを橋渡しにボゴールの皆様との絆もしっかり続いています。インドネシアに滞在する間、人との出会い、一期一会の「縁」を心に温めていきたいと思っています。



バリ発



## ヴィラで働く

七瀬 ゆかり ( '03 卒 )

バリのヌサドゥア地区にあるプライベートヴィラ「カユマニス」で働いて3年半になります。カユマニスは現在バリ内に3ヵ所と中国南京に展開中です。1棟ずつ分かれ、それぞれ“隠れ家的”雰囲気を持ったプール付きのヴィラです。ゲストリレーションの仕事はとても張り合いがあります。時間をかけておもてなしの心をしっかり学んでいきたいと考えています。

大学卒業後、海外でのサービス業に就くことを目指し、研修生センターに登録したのがきっかけです。そのセンターから紹介され、研修の最初は「ヌサドゥアビーチホテル」。大ホテルでは、自分の理想と合わないと思いがけていた時、出会ったのがカユマニスの元支配人でした。「1人ひとりのお客さまをおもてなしする」というコンセプトに惹かれ、1年の研修後、カユマニスに移ったのです。

私達日本人スタッフの仕事は日本からのお客様のお手伝いをさせて頂くほか営業活動、ヴィラメンテナンス管理など仕事もさまざまです。インドネシア人スタッフと日本について話しあうのも私の大事な仕事です。

「日本人はどうして平均結婚年齢が遅いの?」「豊かな日本でホームレスが増えているのはなぜ?」といった細かいことから社会問題まで質問は多岐に渡ります。多くのインドネシア人が親日家で日本について非常に関心が高いように感じます。

去る6月にインドネシア人スタッフと東京を訪問する機会に恵まれました。数々の旅行代理店を訪問し、貴重な情報が得られました。燃油料の値上げにより海外旅行を控える日本人が多い中、バリは依然注目度が高く、旅行者数も増えているそうです。

4人のインドネシア人上司は全て日本初訪問でしたが「日本はとても清潔で時間に正確だ」と口を揃えて驚いていたのが印象的です。日本に渡るインドネシア人も年々増え、有名ミュージシャンがコンサートを行ったという話もよく耳にします。インドネシアと日本が今後益々良い関係を築いてくれることを望みます。



「カユマニス・ヌサドゥア」の夜景。⑤は仕事仲間のバトラーたちと



バリでの生活は研修を含め通算5年。「カユマニス・ヌサドゥア」は2004年9月のオープンですが、バリでは今なおホテルやヴィラの建設ラッシュが進んでいます。大型のショッピングモールや遊戯施設も驚くほどたくさん誕生しています。また、バイクの数が減り、車の数が増えてきました。シンガポールの高級パン屋さんやドーナツ店が進出して



人気を集めたり、スパ・サロンに通う若者が増えたり...。人々の暮らしにも変化が見られます。北部シンガラジャにも空港建設案などが出ており、開発のスピードは急ピッチです。

バリ語にもだんだん慣れてきました。休みには、よく海でもぐります。元々のんびりとした性格の私にとって、時間の流れがゆっくりとしたこの島は住むのに適していたのでしょう。

ホームシックになった時、思い出すのが大阪外国語大学で学んだ4年間です。きちんと丁寧なインドネシア語を教えて

頂いたお陰で、初めてインドネシアのお客さまをお迎えした時も自信を持って対応させて頂くことができました。

コンシェルジュとしての役目もありますので、バリ内の情報も自分の足で確かめてしっかりつかんでおく必要があります。同時に、日本の最新情報はインターネットでチェックしています。英語・インドネシア語を勉強するのも日課。日本のホテリエ、スパの専門家と交流を持ち、専門家から学ぶことで常にお客さまが求めるニーズに応えていけるよう努めています。

一人前のホテリエになるまでには、まだまだです。

(ヴィラの正式名称は Kayumanis Private Villa & Spa at Nusa Dua ホームページ <http://www.kayumanis.com>)

寄稿

Apa &amp; siapa

## ポポと私の国際結婚

角村 めぐみ ('05 卒)

08年6月末に結婚式を挙げました。夫はインドネシア人です。在学中にジョグジャカルタ留学もしましたが、まさか人生のパートナーまでインドネシアの人になるとは学生の頃は思いもしませんでした。縁あって知り合い、3年半の付き合いを経て春に入籍しました。

今年で在日10年目になる夫は人生の3分の1を日本で過ごし、日本語を話し、日本食を食べ、最近のお笑い芸人やスポーツなどは私よりも詳しいほど。そんな彼と和式の生活を2ヵ月して、



カトリック神戸中央教会で挙式のあと、両家族に囲まれて挙式の5日前に夫のママ(母)とポポ(祖母)が来日しました。

私にとってインドネシア語しか話さない人と触れ合うのは久しぶりで、しかも留学中でも耳にしたことのなかった西ティモール訛り。ポポに至っては時々テトゥン語が混ざってしまうので、初めはチンプンカンプンでした。しかし、ママの足の治療のための1ヵ月半の滞在の間に、訛りにも慣れ、ポポの話も半分ぐらいは理解できるようになりました。ポポがよく口にするのはクンクン(夫の祖父)との話でした。

クンクンは日本兵の憲兵隊長としてポポの住んでいたアタンブアの町に来て、そこで2人は結婚しました。その結婚生活は6ヵ月目で日本が原爆を投下されて敗戦、クンクンは妊娠2ヵ月だったポポを残し帰国することになりました。帰る2日前にポポに帰国することを告げ、帰国前夜に「子供が男ならマサル、女ならユミコと名づけてほしい」と、自分の名前と住所、『勝』『ゆみ子』と書いて教えたそうです。しかし、住所は変わっていたのか、間違っていたのか、連絡がとれなくなってしまいました。たまたま、ママが小学生の時にクンクンの友人の日本人と出会い、再び手紙のやりとりが出

て教えたそうです。しかし、住所は変わっていたのか、間違っていたのか、連絡がとれなくなってしまいました。たまたま、ママが小学生の時にクンクンの友人の日本人と出会い、再び手紙のやりとりが出



来日した夫の母と祖母が披露宴でもやさしく

来るようになりました。ただ、2人は再会することなく、クンクンは日本で亡くなりました。

短い結婚生活でしたが、ポポはいくつか日本語を覚えています。私にお土産の指輪をくれたときもママが“bagus”と言っている隣でぼそっと“Joto”と口に出し、今時「上等」なんて言葉を耳にしなくなった私と夫は驚きました。“Kungkung bilang bukan JODOH tetapi JÔTÔ”とポポは嬉しそうに

話します。夫と私のカナダへのハネムーンの写真を見ていても、山をバックにした写真を“Ini gunung Fuji kah? ”。そして、静岡出身で富士山の麓に住んでいて...と、クンクンのことを話し始めてしまう始末でした。そんなポポが日本に居る間にクンクンのお墓を探して連れて行ってあげたかったのですが、手がかりも少なく、自分たちのことだけでも忙しかったので願いは叶いませんでした。

日本滞在中に私の名前は覚えられませんでした。60年以上も前のたった半年間の結婚生活のことを今でもポポは鮮明に覚えており、その愛の深さには胸打たれるもの



新婚旅行の写真。バックは富士山!?ではなく、カナディアンロッキー

があります。私は結婚したばかりですが、そのように深い絆でつながってられる関係でいつまでもいたいものです。

皆さんの中で近いうちに、東ティモールとの国境そばのアタンブアに行く機会がある

方は、「TOKO SAKURA 51」を訪れてみてください。由美

子という日本名を持つママと、おちゃめなポポがきっといるはずですよ。



寄稿

Apa &amp; siapa

## 留学と「日々格闘」の今と

松本 晋 ('08 卒)

今春、ようやく大学生生活を終え社会人になりました。現在は、大阪にありますメーカーに勤務しております。

2002年に外大に入学し、2年の休学を経て大阪大学外国語学部の初めての卒業生となりました。周囲からいろいろと言われますが、私としては外大生として卒業したかったなど残念に思っています。

2005年から2006年にかけて1年間インドネシアへ留学しました。幸いにも「ダルマシスワ」(インドネシア政府奨学金制度)で留学することになり、煩雑な手続きもなくインドネシアに渡ることができました。世界中の人が言語、音楽、踊りなどを勉強するためにダルマシスワに参加して

おり、最初のオリエンテーションに出席した時の刺激的な感覚を今でも覚えています。

さまざまな大学に分かれて1年間勉強するのですが、私はインドネシア大学で勉強しました。最初の5ヵ月を

BIPA(外国人向けのインドネシア語コース)で学び、残りはインドネシア人と一緒に講義に参加していました。日本人向けの日本語専攻みたいなもので、後半のコースは、なかなか大変な毎日

でした。とにかく、朝が早いのです。一番大変なことは朝7時30分に始まる講義に間に合うことだったでしょうか。

お金を払えば満員の電車でも運転席に乗れたり、バスの運転手が帰りたいという理由でバスを降ろされたり、道路が渋滞ならバイクは歩道を走ったり、進行方向が渋滞なら



留学時に友人らとパリで。左から一人目が筆者

反対車線に行っちゃってバックしたりなどと、インドネシアでの生活は忘れられない思い出がいっぱいです。

今でも同級生と会えば自然とインドネシアの話題になり、懐かしい思い出話をしてはまたインドネシアに行きたいと話したりしています。そして時には、あの屋台の Ayam Goreng が食べたいなど、ふと思うこともあります。

さて、仕事の話をしていただきますと、外大とはあまり縁のない経理の担当として日々格闘しています。海外に行かずして

グローバルな環境に配属され、英語能力を必要とされることが多く、自分の力のなさに外大出身として情けなく感じることも多々あります。また、経理ということで、簿記はもちろんのこと、会社法、税法なども熟知していなくては話にならず、学生の頃とは比べられないぐらいに勉強しなくてはなりません。

勉強といっても学生時代はお金を払う立場でした。しかし、今は会社からお金をもらっての研修などが多く、そこが学生の立場とは異なる点でしょうか。

インドネシアとの関係について述べますと、私自身はインドネシアとの関

連はありませんが、周囲ではインドネシアのことについての話が日々飛んでおり、「インドネシア」という言葉を聞く度に反応してしまいます。

今は目の前のことで精一杯です。でも5年後、10年後、いつかはインドネシアと関連のある仕事をしてみたい、そしてまたインドネシアを訪れてみたいと思う今日この頃です。



①インドネシア大学のキャンパス風景。広大な池と緑も豊か②友人の誕生日に用意された料理

寄稿

Apa &amp; siapa

## 私の Indonesia と 南十字星会同窓

梶谷 昌博 (56 卒)

在近隣のインドネシア留学生から私は kakek と呼ばれています。日本語を教えたり、医療関係の世話や支援をしたり。Sudah tua ですが、perlahan2 dan tenang2 saja の毎日です。今回、佐々木女史(67 卒、以下年次のみ)からのお勧めで駐在当時のイ情勢・巡り会えた同窓・近況などを思いつくまま綴ることにしました。

戦後の日伊経済関係が動き出しても、暫くは、就職はむずかしかった。私の卒業した 1956 年になって、インドネシア関係にはようやく僅か 4 人(後にザンビア大使となった増井氏、野村の中園氏、丸福の岸田氏と私)だった。私は幸い住商に入社、爾来 4 回 10 年弱の駐在を含めて半世紀に亘り直接・間接にイ国とのつながりが続いた。これは外大での pelajaran Indonesia とイ国の親日的で温和な人々のお蔭と感謝している。

《59 年》支部会の席では武居氏(31)、藪氏(34)、樋泉氏(37)ら大諸先輩の薫陶と激励を受けた。熱き志を胸に DC 双発プロペラ機で、熱さと椰子油の匂いでむっとするクマヨラン着、ジャカルタに初赴任した。ホテルデスインデス、バンドンのホテルホームなどにオランダ時代の名残りを留めていた。庶民の生活は貧しく、経済は低迷し貿易量も少なかった。外国人政策も指紋登録と 5 週間毎の visa 更新など厳しかった。ただし、ジャワの人々は優しくかった。

《63 年頃から》民間取引・諸資源の輸出・賠償などが盛んになり、週刊誌に D 夫人や賠償商社が登場し、ビジネスモラルが問題に。三井物産の北村氏(32)、長井氏(36=スラバヤ総領事)、書記官時代の増井氏に公私に亘りお大変世話になった。板坂氏(47)が最大の商社 CTC で活躍されていたのを後で知った。

府中市の国際交流フェスティバル。インドネシアの説明と PR を留学生家族とみんなで (筆者は左から 2 番目)



《65 年 - 67 年》スカルノからスハルトへの大統領権限移譲にかけては、Bank Indonesia の default で貿易決済ができなくなるなど経済が破綻した。経済から国民の目をそらすかのように Ganyang Malaysia 政策・イギリス大使館焼討ち・華僑排斥運動が盛んになり、9.30 事件へと政治も混乱した。私も、幾つかの危険で悲しい事件を目撃した。

《68 年から》スハルト時代は、パークレーマフィア教授陣の活躍・IGGI・日伊経済協力・外資導入・石油ガス開発・材木/合板の輸出・華僑系企業と pribumi の隆盛などで大きな経済発展を遂げた。一方では、74 年の反日デモ・選挙毎の争乱・貧富の格差・治安の悪化が駐在員生活をも脅かした。

しかし、日伊政治経済関係は順調に推移したと思う。この時期、私の知り得た範囲内では、三井物産の日比野氏、松下電工の浜辺氏、パソコンの高井氏(各 57)、浜野氏(60=ホンジュラス大使)、米田氏(60=スラバヤ総領事)、



北京のソフトボール大会で。㊦前田氏㊦優勝の荒公使

目黒氏(61=パーレン大使)、野瀬氏(62=モザンビーク大使)、ユアサの辻氏(62)、山下氏(66=パプア NG 大使)らが活躍されていた。私は通信・電力・アサハンアルミ等の案件に係わることが出来た。そして住商の後輩:金田(57)、向井(57)、滝本(60)、西田(60)、高野(62)、瀧口(63)、内原(64)、三瀬(71)諸氏らが大いに活躍健闘された。

《85 年頃》私のインドネシアは終わる。

《90 - 93 年》中国総代表として北京に駐在。今日の中国大躍進の予感を実感した。当時、中伊国交回復の直後で、中国各地でインドネシアのことをよく聞かれ、説明と PR に努めた。兼松の中国代表前田氏(59)には、北京日本人会運営などに絶大なサポートを頂いた。

《その後 99 年まで》住商情報時代。大久保元支部長(53)、磯田元咲耶会会長(55)、ブラジルプロポリスのエクセル和田社長(55)らに親しく声を掛けて頂いていた。



定年退職後、再びインドネシアと係わりたくて、文頭の volenter をしている。

インドネシアでは日本の高度医療技術を望んでいる人が多いと聞いている。危険を伴う3度目の帝王切開出産のため、都立府中病院でお産を希望した留学生夫人のほか、数人の入院をサポート。通訳や入院の菜のイ語訳版・看護婦との病院語対比カードを作るため、勉強をし直した。例えば、tetek は payudara の方がいいという使い分けなど。病院・治療関係のインドネシア語に興味のある方はいますか？

**Pada penetup** : インドネシアの多種多様な資源・看護介護師受け入れを含む EPA(経済連携協定)。これらの関連協力案件は益々盛んになると思う。従って、留学生の諸君には期待をかけている。過去、留学生では

海部総理(Ⓢ)の訪中歓迎パーティーで



ギナンジャールさんを始め多くの方々が発展と日伊友好に尽力貢献された。今は、私の近辺だけかもしれないが、優秀なのに日本企業に就職していないし、帰国もしない留学生がいる。学生の個人差、インドネシアの国民性や KKN、日本側の制度と受け入れ態勢などに問題があるうか。何か良い方策がないのだろうか。Buat apa susah, buat apa susah, susah itu ta'ada gunanya (まあ気楽にやろうぜ)

と私も歌うしかないのかと自問自答する昨今である。

【お詫び：文中には亡くなられた方も多く、ご厚誼に感謝しご冥福をお祈りします。また、会社名に通称や略称を使い、氏名登場の了承も得ていません。ともにお許しください】

消息・ひとこと (敬称略)

- 小原義男 ('53 卒) =名古屋市  
インドネシア生涯学習と尺八の指導・演奏会。老骨に鞭打っています。
- 中村 徹 ('58 卒) =大阪府高槻市  
利便性重視で4月に高槻市沢良木に転宅。
- 西脇 孜 ('60 卒) =大阪府豊中市  
インドネシア駐在から帰国後 10 年間名古屋に住んでいましたが、2月に大阪に戻りました。
- 西川哲朗 ('65 卒) =千葉県浦安市  
会報で懐かしい方々の原稿を楽しく拝読。小杉さん、東京のグリークラブOB会にぜひご参加を。
- 須田 和 ('79 卒) =兵庫県尼崎市  
市女性センターに勤務。新しい環境で丸4年が過ぎました。
- 澤田宏次 ('84 卒) =さいたま市  
海外勤務から戻り、久々の日本です。
- 平岡 毅 ('94 卒) =京都市山科区  
第6号のブンガワン・ソロ作曲家グサン氏のことは妻(インドネシア人)も知っていました。やはり有名なんですね。
- 里 真吾 ('02 卒)  
08年7月からインドネシアに移住。ジャカルタの Bina Nusantara 大学で、日本語教師に。



7月12日の関東支部懇親会。出席者たちが笑顔で = 東京・千代田区のレストラン「LA STELLA」

懐かしい仲間

'58 卒同期生 卒業して 50 年経つ同期の「きらきら会」(卒業生 21 人、物故 3 人)。還暦後は 1 泊 2 日のつどいを続けており、12 回目の今年は 6 月 5 日に名古屋で。紅一点の磯浦女史をはじめ 10 人が出席し旧交を温めました。  
「毎日が日曜」と言いつつ、お互い結構忙しい様子。話題は健康や闘病から町内会活動や小旅行、囲碁やゴルフ、老後の備え...。夜半まで話が尽きず、翌日は徳川園や美術館などへ。  
戦中・戦後の混乱期をしぶとく生き抜いてきた世代だけに、後期高齢者入りを目前に、まだまだ元気な仲間達です。(山口)



投稿のお願い

「南十字星」の第8号は09年4月に刊行の予定です。投稿をお待ちしています。テーマ自由。原稿の長さは原則 1200~1400 字。カラー写真も添付してください。Eメール、郵送でも結構です。  
あて先は、岩谷英志 (rocky3@wombat.zaq.ne.jp)  
住所 〒563-0029 大阪府池田市五月丘 2-5-113-402

おくやみ申し上げます (08年春以降判明の方々)

- 大津篤造 (40 卒) =鹿児島市 07年9月死去。
- 藤木和三郎 (44 卒) =神奈川県逗子市 08年3月死去
- 栗本 明 (51 卒) =奈良市 07年11月死去。
- 川島布義 (57 卒) =千葉県習志野市 08年2月死去。